

二〇三三年一月一七日

北風吹いて白雲迅き遠嶺かな
藁屋根を見下ろしてをる木守柿
好物の芋煮を供へ夫偲ぶ
園はいま銀杏黄葉のパラダイス
冬日射揉みて煌めく早瀬かな
凜として寒菊薫る仏間かな
堆き銀杏黄葉に埋まる径
残照の海辺に群るる冬かもめ

二〇三三年一月一六日

レースなき馬場を席卷椋鳥の群

二〇三三年一月一五日

猫パンチふわりと躲し雪螢
手のひらに胎の温もり寒卵

二〇三三年一月一四日

瀬の楽を聞くやに傾ぐ歌碑小春
くるぶしをくすぐる深き落葉道
枯鶏頭焚くや炎のまた赤く
鈴掛の紅葉かつ散る並木道
序破急と池に散り込む風落葉
白障子貫いてくる日差しかな
木々の影斑に絡む縁小春
白骨の風倒木や冬河原

素 秀

よし子

たか子

満 天

こすもす

たか子

康 子

千 鶴

あひる

素 秀

みきお

明日香

康 子

素 秀

はく子

ぼんこ

千 鶴

康 子

澄 子

二〇三三年一月一三日

枯螳螂縋りつきをる日向窓
山壁を埋め留まる冬の霧
光芒をなす竹林の冬日差し
冬雲にとどく煙や登り窯

二〇三三年一月一二日

七竈燃え立つ森のレストラン
茫々と平城宮跡冬芒
山越えの遍路の道に奴草
干柿の簾を透けて居間明かり

二〇三三年一月二日

菊に立つ今日より後期高齢者
今日の冷え遣影に語り窓閉める
この森もキャンパスといふ北狐

素 秀

明日香

康 子

愛 正

む べ

もとこ

素 秀

かえる

せいじ

たか子

む べ

毎日句会みのる選・二〇三三年一月一九日